

臨床実践家による「財布探し」課題の不通過反応に対する解釈の検討

著者	清水 里美, 加藤 隆
雑誌名	平安女学院大学研究年報
号	18
ページ	63-73
発行年	2018-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1475/00002328/

臨床実践家による「財布探し」課題の不通過反応に 対する解釈の検討

清水 里美^{*1}・加藤 隆^{*2}

要 旨

新版 K 式発達検査 2001 は、その実用性の高さから、乳幼児から成人まで、幅広い臨床現場で用いられており、現在 2020 年版の改訂作業が進められている。その中に含まれる「財布探し」課題は、想定された状況での探索企図の合理性、計画性を調べるもので、学童期の発達の様相をよく反映されているとされている。しかしながら、成人でも判定基準に満たない反応が生じることが珍しくない。したがって、現在採用されている判定基準について、妥当性の検証が求められる。

そこで、本研究では、判定基準に関わる検討材料を得るために、2つの探索的な調査を実施した。調査 1 では、臨床実践家が「財布探し」課題の臨床的解釈において、受検者の年齢をどの程度考慮しているのかを検討した。調査 2 では、判定基準とされる探索の合理性、計画性、詳しさおよび一貫性について、どのような観点から判断されているのかを検討した。

調査 1 の結果から、受検者の年齢は臨床的な解釈のうえで影響を及ぼしており、発達水準に見合わない反応は、知的な問題に関連付けられやすい傾向がうかがえた。また、調査 2 の結果から、探索の一貫性は描かれた探索経路の対称性と関連が強く、探索の詳しさは空白の少なさと関連があることが確かめられた。一方、典型的でない反応の判定基準として示されている、「道の途絶がない」「無駄な交差がない」という条件は、必ずしも探索の合理性や計画性を保障するものではないことが明らかとなった。したがって、典型的でない反応に対する判断基準をより精査して示すことが求められる。

【キーワード】 財布探し 臨床実践家 新版 K 式発達検査

問題提起

児童相談所や知的障害更生相談所、特別支援学校、保健センター、療育施設、発達障害者支援センターなどでは、対象児者の発達の状態や知能の程度について知るために、さまざまな発達検査や知能検査が用いられている。その中でも、新版 K 式発達検査 2001（以下、新 K 式検査 2001 とする）は、とくに療育手帳の発行のための査定に広く用いられているものである（吉村ら、2016）。新 K 式検査 2001 は、0 歳から成人まで適用でき、乳児が成人になるまでの発達過程の中で、どのようなことができるようになっていくのかといった観点から検査項目が採用されている（清水、2014）。したがって、子どもの発達過程を理解するうえで、有用なツールである。とくに、新 K 式検査 2001 の検査項目の中の「財布探し」課題は、学童期の子どもの発達を観るのに役立つ指標とされている（近藤、1986；楠、2009）。

「財布探し」課題は、受検者に対し、B5 判の用紙に描かれた菱形（縦 8cm、横 5cm、下が 5mm 程度開いているもの）を示し、口頭で「これは広い広い運動場です。短い草が一面に生えています。

* 1：平安女学院大学短期大学部

* 2：関西大学大学院

もしあなたが、この中のどこかで、お金のいっぱい入った財布を落したと考えてください。その落した財布をきつと見つけ出そうと思ったら、どういうふうに歩いて探したらよいでしょうか？この入口（図の下方の開いているところを指さす）から入って、あなたが探すときに通るところを、この鉛筆で、ここに描いてください」と教示し、ただちに描かせるものである（新版 K 式発達検査研究会、2008）。

「財布探し」は、Terman (1916) が、Binet と Simon の作成した知能検査 (Binet-Simon Intelligence Test: Binet, 1905 Kite 訳 1916) を改良し、スタンフォード・ビネ知能検査を作成した中に含めた「ball and field」をさらに改訂した「plan of search」(Terman & Merrill, 1937) をもとにしている。「ball and field」は、円形の図を示し、なくしたボールを探し出すよう受検者に指示するものであり、鈴木 (1948) により、「球さがし」という検査項目名で用いられている。

Terman (1916) は、「ball and field」課題における子どもの反応を分析し、合格の基準となる計画性について、道を何度も交差したり、途絶（鉛筆をいったん紙から離し、別のところから始める）があったり、ということがないということから判断していた。例えば、運動場いっぱいにも何度も交差を繰り返し、ランダムに蛇行する線を描くもの、一本のまっすぐ、あるいは曲がった線、短いでたらめな直線、扇状や螺旋ではないカーブなどは不合格反応の例としてあげている。また、「交差がほとんどない」「線が平行であったり、左右対称であったりする」「途絶がほとんどない」といった反応からは、描く前にいくらか考慮したことがうかがえると述べている。Terman (1916) は、およそ 1500 人の受検者の反応を分析し、4 歳ごろの子どもでは課題が理解できず、6 歳ごろでは理解はできるが探し方に計画性がなく、8 歳ごろに不十分ながらもプランの存在がうかがえる反応（左右対称である、途絶がほとんどない、など）がみられるようになることを見出した。この 8 歳ごろに出現する反応を 8 歳水準での合格反応（以下、合格案とする）とした。そして、さらに論理に適った計画性のある安定した反応（ほぼ完全な螺旋状で、入口か運動場の中心から始まるものや、ほぼ平行な横断線など）を 12 歳水準での合格反応（以下、優秀案とする）とした。一方で、6.7 歳の子どもでも高い水準の反応がみられることもあれば、平均知能の大人でも低い水準の反応がみられることもあることを指摘している。

中瀬 (1986) は、年長の発達水準（優秀案）に相当する、より高度な計画性とはどのようなものであるかを検討するために、幼児から小学校 6 年生までの計 826 名を対象に、横断的なデータを集団式で収集した。得られた「財布探し」の反応をいくつかの尺度で分類したところ、年齢が進むにつれ、画面から空白がなくなり、単一の規則によって丁寧な描画をおこなうようになり、画面を周回する数が増加することを見出した。とくに、始めから終わりまで一貫した単一の規則での探索が年齢とともに単調増加し、不規則な探索は単調減少していた。これらから、中瀬 (1986) は、「財布探し」課題を通して、当初から完成図を見通す洞察力と最後まで同じ態度を維持できる注意の集中力の発達がうかがえるとしている。そして、中瀬 (2002) は、上記の調査結果を踏まえて、探索の合理性は描かれた図形の形（すなわち、探索経路）で判断し、渦巻き状やジグザグ状が典型的であるとした。典型例以外の反応の合理性については、「探索方針が一貫していること」「同じ所を通らず、入口から出口まで 1 回で歩けること（いわゆる一筆書きで書かれていること）」を基準とするとしている。対して、不合理な反応の例として、「道の途絶が多い」「道の交差が多い」ものとしている。また、計画性は、探索の詳しさ（精密さ）で判断するのが妥当であるとし、探索の詳しさについて、「周回数」（菱形の縦方向あるいは横方向に対角線を引き、表現された探索の跡との接点の数を 2 で割ったもの、中瀬、1986；中瀬、2002）という新たな概念を定めた。周回数の増加の傾向が年齢の進み方と一致することから、客観的な基準となるとしたのである。新 K 式検査 2001 の「財布探し」でも、この中瀬 (1986) の結論に従って、合格基準として周回数が採用されている。すなわち、周回数が 2 以上 4 未

満は、合格（新 K 式検査 2001 では、「財布探し（Ⅰ）」通過）、4 以上は優秀案（新 K 式検査 2001 では「財布探し（Ⅱ）」通過）と定められている。

ところで、Terman（1916）は、平均知能の成人でも低い水準の反応がみられることがあると述べていた。Buhler（1938）は、1 周で終わる反応について、教示に「広い広い運動場です。真ん中からは端が見えません」と付け加えていない場合は、「不合格とはいえない、合理的な解決であると考えられる」と述べている。鈴木（1956）も、「球さがし」の反応について、単に 1 周するだけの反応がたくさん出ることを指摘し、計画性の有無について保留にしている。新 K 式検査 2001 においても、実際に、成人に「財布探し」を実施した場合、1 周で終わる反応や周回数不足の反応がみられることがある。新 K 式検査 2001 は、発達障害者への支援内容を検討するための査定にも用いられており、「財布探し」課題への反応も臨床的な解釈の対象となる。成人における、いわゆる周回数不足の反応は、臨床場面ではどのように解釈されているのであろうか。発達の未熟な反応とされているのか、何らかの適応上の問題の現れとされているのか、あるいはとくに気になる反応とされていないのかについて、明らかにしておく必要があるだろう。

そこで、本研究では、以下の 2 点について明らかにすることを目的に、2 つの調査を実施する。一つ目は、「財布探し」における周回数不足の反応例について、臨床的解釈の際に、受検者の年齢がどのように影響するのかである。二つ目は、探索の合理性や計画性といった評定基準は、何をもとに判断されているのかである。中瀬（2002）は、探索の合理性について、探索経路をもとに示される「方針の一貫性」や「途絶がなく一筆書きであること」から判断するとしている。また、計画性について、探索の精緻さから判断するとしている。それでは、典型例とされる渦巻き状やジグザグ状の探索以外では、「方針の一貫性」はどのようなところから判断されるのであろうか。「途絶がなく、一筆書きである」ことが、方針の一貫性を示すのであろうか。また、方針の一貫性が疑われる反応例であっても、計画性は探索の詳しさから判断されるのであろうか。これらを検証することで、現在の判定基準を見直すための示唆を得たい。

調査 1

目的

周回数不足反応について、受検者の年齢によって評定や解釈が異なるのかどうかを検証する。すなわち、周回数不足反応が低年齢者によるものとされた場合と成人によるものとされた場合で、評定は同じであっても、臨床的な解釈が異なるのかどうかについて明らかにする。

方法

調査対象

新 K 式検査 2001 の実施経験のある、臨床心理士、臨床発達心理士および特別支援教育士などの心理関連の有資格者（以下、臨床実践家とする）を対象とした。

調査時期

2015 年 7 月に京都国際社会福祉センターにて開催された K 式発達検査研究会事例検討会、同年 8 月に A 教育センターにて開催された研修会、および同年 8 月に開催された B 県臨床心理士会研修会にて、参加者に口頭および文書にて研究目的を説明のうえ回答への協力を依頼した。

調査方法

「財布探し」課題において、1 周で終わる反応を含めた 3 種類の反応例とともに、その反応者の年齢層を「小学校低学年」「小学校高学年」「中学生」「成人（20 歳以上の方）」と仮定して示し、それぞれについてどのような評価をおこなうかを選択肢と自由記述にて回答を求めた。選択肢は、「とく

に臨床的（発達の）に気にならない」「どちらかという気にならない」「どちらかという気になる」「とても気になる反応である」の4択とした。

分析方法

1周で終わる反応例に対する選択肢への回答および自由記述の内容についてのみ検討した。自由記述については、内容を精査し、同じような意味のものを集めた。

倫理的配慮

調査の趣旨および回答結果の取り扱いについて冊子の表に記載し、無記名での回答とした。なお、分析の参考とするために新K式検査に関する臨床経験や実施機関、主な対象者、性別についての記載を求めた。

結果

対象者

回答は、27名（男性13名、女性13名、不明1名）から得られた。新K式検査2001の経験年数は、平均14.12年（0.5年～48年、標準偏差14.6、無回答1名）であった。臨床実践に関わる資格等については、臨床心理士14名、臨床発達心理士3名、特別支援教育士5名、その他（医師など）6名、不明1名であった（資格の重複あり）。臨床実践における対象者については、乳幼児が24名、小学生が19名、中学生が8名、高校生が7名、大学生が2名、成人が5名であった（対象者の重複あり）。新K式検査実施機関については、保健所・保健センターが7名、児童相談所・発達相談所が7名、療育施設が3名、医療機関が3名、保育所・幼稚園が3名、学校が6名、知的障害者更生相談所が4名、その他として教育センターが3名、作業所が1名、児童養護施設が1名、NPOの相談所が2名であった（実施機関の重複あり）。

反応の解釈

回答者27名中22名（81.5%）が不通過としていた。通過としていた4名について、Ⅰ通過が3名、Ⅱ通過が1名であった（表1）。Ⅱ通過と判定していた回答者は臨床心理士で経験年数は5年であったが、主に保健所・保健センターで乳幼児を対象として実践しており、「財布探し」の実施経験は乏しいものと考えられた。一方、Ⅰ通過と判定した3名のうち1名は臨床心理士で経験年数は約1年、Ⅱ通過と判定した臨床実践家同様、保健所・保健センターで乳幼児を対象に実践していた。残りの2名は、いずれも臨床発達心理士および特別支援教育士であり、経験年数は10年を超えていた。

年齢層別評価では、表1に示したとおり、低学年の反応であれば「どちらかという気にならない」が、高学年の反応であれば「どちらかという気になる」、中学生以上であれば「とても気になる」と評価するものの割合が最も高くなっている。また、通過と判定した4名についても、反応者の想定された年齢層が高くなるにつれ、気になる反応と認識していたことがうかがえる。

自由記述欄に書かれた「気になる」理由について、年齢層ごとに内容をカテゴリ分けした（表2）。低学年では、「取り組み姿勢の問題」が一番多く挙げられていた。高学年および中学生では「課題意図理解の弱さ」が最も多く、成人では「知的発達の問題」が仮説としてまず検討され、次に「情緒面の問題」が挙げられていた。

表 1 臨床実践家による通過判定と年齢層別評価

想定された 受検者の 年齢層	不通過判定					I 通過判定					II 通過判定					無 回 答	計
	気 に な ら な い	ど ち ら か と い う と 気 に な ら な い	ど ち ら か と い う と 気 に な る	と と も 気 に な る	小 計	気 に な ら な い	ど ち ら か と い う と 気 に な ら な い	ど ち ら か と い う と 気 に な る	と と も 気 に な る	小 計	気 に な ら な い	ど ち ら か と い う と 気 に な ら な い	ど ち ら か と い う と 気 に な る	と と も 気 に な る	小 計		
低学年	7	8	7	0	22	2	0	1	0	3	1	0	0	0	1	1	27
高学年	2	4	12	4	22	0	0	2	1	3	0	1	0	0	1	1	27
中学生	1	0	10	11	22	0	0	1	2	3	0	0	1	0	1	1	27
成 人	2	2	7	11	22	0	0	0	2	2*	0	0	0	1	1	1	27

数値はその項目を選択した人数

*1 名は無回答

考察

調査 1 の結果から、1 周で終わる反応は、「財布探し（I）通過」年齢を超えた小学校高学年以上で、臨床実践家によって「気になる反応」ととらえられるようになることがわかった。また、小学校高学年から中学生にかけては、「課題理解の弱さ」や「知的発達の問題」と関連づけて解釈され、成人では「知的発達の問題」あるいは「情緒面の問題」と関連づけて解釈されていた。これらから、反応者の年齢は、解釈に影響を及ぼすことが改めて確認された。

現在の新 K 式検査 2001 の判定基準に従うと、1 周で終わる反応は不合格（新 K 式検査 2001 では「不通過」と呼ぶ）となる。しかしながら、先に述べたように、Buhler (1938) は 1 周で終わる反応について、教示で運動場の広さが明確にされていない場合は、合理的な解決であると考えられるとしていた。また、鈴木 (1956) は「球さがし」での 1 週の反応について、判断を保留にしていた。したがって、1 周で終わる反応の解釈においては、反応者が成人であったとしても、実際に「課題意図理解の弱さ」や「知的発達の問題」によるのか検討の余地があると考えられる。

年長になるにつれ、描画表現が簡略になることは、グッドイナフ人物画検査で指摘されている（小林、1977）。すなわち、年齢の増加にしたがって情緒的な問題に関わり、単純化しての描画を行なう者が増加してくることが知られている。「財布探し」が、自由に人物を描くよう要求するグッドイナフ人物画検査ほど受検者の情緒的な面に働きかける課題であるとは考えにくい。しかし、描画表現において、年齢が高くなるにつれ簡略化表現をおこなう割合が高くなると仮定すれば、「財布探し」においても、成人での 1 周で終わる反応は簡略化表現の現れであるのかもしれない。また、「合理的」には、「効率よく、無駄がない」という意味も含まれている。したがって、周回数が多ければ多いほど合理性に優れた反応であるともいえない。このように考えると、成人における 1 週の反応は、論理的思考やプランニングの弱さによるものではなく、「簡略化反応」か、あるいは「効率的な反応」である可能性も考えられる。

1 周で終わる反応の解釈について、鈴木 (1956) が結論を保留にしたのは、判定基準となる合理性・計画性に関わる情報が乏しいからであった。それでは、そもそも判定者は、合理性や計画性をどのような観点から判断しているのでしょうか。新版 K 式発達検査研究会 (2008) では、探索の合理性および計画性のある探索図の典型として、渦巻き状の探索経路とジグザグ状の探索経路の具体例を示している。そして、それら以外の考えられる例として、「探索方針が一貫していること」「同じ所を通らず、入口から出口まで 1 回で通っていること（いわゆる一筆書きで書かれていること）」という条件をあげている。すなわち、ここでは、探索の合理性や計画性は「探索の一貫性」と関連づけてとらえ

られている。さらに、不合理な反応例として、「道の途絶が多い」「道の交差が多い」と記述されている。ところで、実際の判定者は、どのような点から、合理性、計画性、詳しさ、一貫性を判断しているのだろうか。とくに、探索の一貫性が高く評価されている反応例は、探索の合理性や計画性も同様に高く評価されるのであろうか。もしも、そうであるとすれば、探索の一貫性は、どのような観点から評定されるのであろうか。2020年版での判定基準を明確にするために、これらの問いへの示唆を得ることが必要である。

表 2 自由記述欄の分析(()内の数字は人数)

年齢層	カテゴリ ()内は人数
低学年	取り組み姿勢の問題(3)
	知的発達の問題(2)
	課題意図理解の弱さ(2)
高学年	課題意図理解の弱さ(8)
	知的発達の問題(6)
	取り組み姿勢の問題(4)
	プランニングの弱さ(3)
中学生	教示のわかりにくさ(1)
	課題意図理解の弱さ(9)
	知的発達の問題(6)
	取り組みの姿勢の問題(4)
	情緒面の問題(3)
成人	プランニングの弱さ(3)
	精神疾患のおそれ(1)
	知的発達の問題(6)
	情緒面の問題(4)
	課題意図理解の弱さ(3)
	プランニングの弱さ(3)
	取り組み姿勢の問題(2)
	判断保留(2)
	他の項目との整合性(1)
	回答の省略の可能性(1)

調査 2

目的

調査 1 では、臨床実践家は反応の解釈の際に年齢を考慮に入れていること、1 周で終わる反応は、反応者の年齢が小学校高学年以上になると、何らかの発達的な問題と関連づけて解釈されることが明らかとなった。一方で、1 周で終わる反応について、探索の詳しさに欠けることは明らかであるが、鈴木(1956)が結論を保留にしているように、探索の合理性や計画性についての判断は難しい。調査 1 の考察で述べたように、新 K 式検査 2001 の手引書では、探索の合理性や計画性について、「探索の一貫性」や「途絶がない」「無駄な交差がない」ことから判断するよう明示されている。しかしながら、「探索の一貫性」はどのように判断されるのであろうか。また、それらは、探索の合理性や計画性の評価において必要条件であるが、十分条件といえるのであろうか。そこで、調査 2 では、新 K 式検査 2001 の実施経験者に対し、明らかに不合理な例(「道の途絶が多い」「道の交差が多い」など)ではないが、典型的ではない反応例を複数示し、探索の合理性や計画性、詳しさ、一貫性がどのような観点で判断されているのかについて明らかにする。

方法

調査時期と調査対象

2017 年 9 月に C 教育センター主催研修会の場で、参加者に口頭および文書にて研究目的を説明のうえ回答への協力を依頼した。研修参加者は、C 県内の公立小学校、中学校、高等学校および特別支援学校の教職員であった。

調査方法

調査対象者の属性に関するフェイスシートをつけた質問冊子を手渡しで配布した。属性については、分析時に参照するため、教員としての経験年数、新 K 式検査 2001 の対象年齢、新 K 式検査 2001 の実施の概数、性別のみを収集し、個人が特定される情報は求めている。回答は、「財布探し」課題の 3 種類の反応例を示し、それぞれについて、探索の合理性、探索の計画性、探索の詳しさ、探索の一貫性に関する 4 件法（とてもそう思う — まったくそう思わない）での評定とその理由、および反応水準を上げるための追加教示案、その他、財布探し課題に関しての反応に迷う例など、についての自由記述を求めた。3 種類の反応例は、2020 年版の改訂に取り組んでいる K 式発達検査研究会で検討されたものの中から、道の途絶がなく一筆書きで、道の交差が多くないもののうち、実施手引書や反応実例集に例としてあげられていない実際の反応例をもとに選定をおこなった。選んだ反応例については、Terman (1916) が、プランの存在をうかがえる例として「左右対称のもの」を挙げていることから、探索経路の左右対称性の効果について着目し、探索方略として図の領域（左右）を分割しているものといないもの、探索経路としての描線が対称形となっているものといないものという組み合わせのうち、異なる判定結果となる 3 例とした。具体的には、次の 3 つである。a) 左右分割・非対称例：左右を分割し、非対称（左側が 2 周、右側が 3 周）に探索し、出口には向かわず、右半分の中央で探索を終えているもので、新 K 式検査 2001 の基準では財布探し（Ⅱ）通過（優秀案）水準のもの、b) 左右非分割・非対称例：外周に沿って左側から 3/4 回ったあと、内側に入り、ひし形状に 1 周回って出口に向かうもので、新 K 式検査 2001 の基準では財布探し（Ⅰ）通過（合格）水準、c) 左右非分割・点対称：外周に沿って 1 周回ったあと、中央を通り、左斜め上→左横→右横→右斜め下から出口へと点対称に描線を引いたもので、新 K 式検査 2001 の基準では財布探し（Ⅰ）不通過（不合格）水準のもの。質問冊子は、反応例の提示順序が、上記の abc、bca、cab の 3 種類となるように作成し、それぞれ均等の数で、かつ座席前後で異なった種類の冊子が配布されるように準備した。

分析方法

新 K 式検査 2001 の実施数が 3 例以上の教職員の回答のうち、すべての反応例に回答が記入されているもののみを分析対象とした。4 件法の回答は、順序尺度として扱い、それぞれの反応例の結果を比較した。また、自由記述については、調査 1 と同様に、内容を精査し、同じような意味のものを集めて示した。

倫理的配慮

研修会での実施について、事前に主催者側の同意を得た。調査の趣旨および回答結果の取り扱いについて冊子の表に記載し、口頭でも説明を加え、無記名での回答とした。また、研修会の目的を損なわないよう、事後に、課題や反応の発達的な解釈に関する解説をおこなった。

結果

対象者

回答は、17 名（男性 4 名、女性 13 名）から得られた。勤続年数は平均 15.2 年（4～35 年、標準偏差 10.2）、新 K 式検査 2001 の実施の概数は、平均 17.1 例（3～50 例、標準偏差 11.8）であった。臨床実践における対象者については、乳幼児が 10 名（59%）、小学生が 17 名（100%）、中学生が 11 名

(65%)、高校生が6名(35%)であった(対象者の重複あり)。

分析結果

それぞれの反応例に対する合理性、計画性、詳しさ、一貫性について、「とてもそう思う」を1、「どちらかというと思う」を2、「どちらかというと思わない」を3、「まったくそう思わない」を4とし、それぞれについて、フリードマンの順位検定をおこなったところ、合理性および計画性には有意差はなかった。詳しさについては、 $\chi^2(2, N=17)=6.703, p=.035$ 、一貫性については、 $\chi^2(2, N=17)=6.255, p=.044$ で、有意差がみられた。しかしながら、多重比較の結果、調整済みではいずれの組み合わせにおいても有意水準には達しなかった(表3に平均ランク、図1に平均値を示す)。

それぞれの反応例について、その評定の理由と反応水準を上げるための追加教示についての自由記述の内容を表4にまとめた。自由記述では、同じ反応例の特徴でも、判定者によって肯定的な評価となる場合と否定的な評価となる場合がみられた。例えば、左右分割・非対称例では、「途中までは一貫性がある」という評価と「途中から一貫性がない」という評価に分かれた。また、左右非分割・非対称では、途中から内側に入った探索経路について、思い付きと受け取る者もいれば、移動距離を短くしようとしている合理的な反応ととらえている者もいた。

表3 各反応例における評定結果(フリードマン検定による平均ランク)

観点	反応例		
	左右分割・非対称	左右非分割・非対称	左右非分割・点対称
合理性	2.24	2.15	1.62
計画性	2.18	2.12	1.71
*詳しさ	1.71	2.35	1.94
*一貫性	2.35	2.06	1.59

* $p<.05$

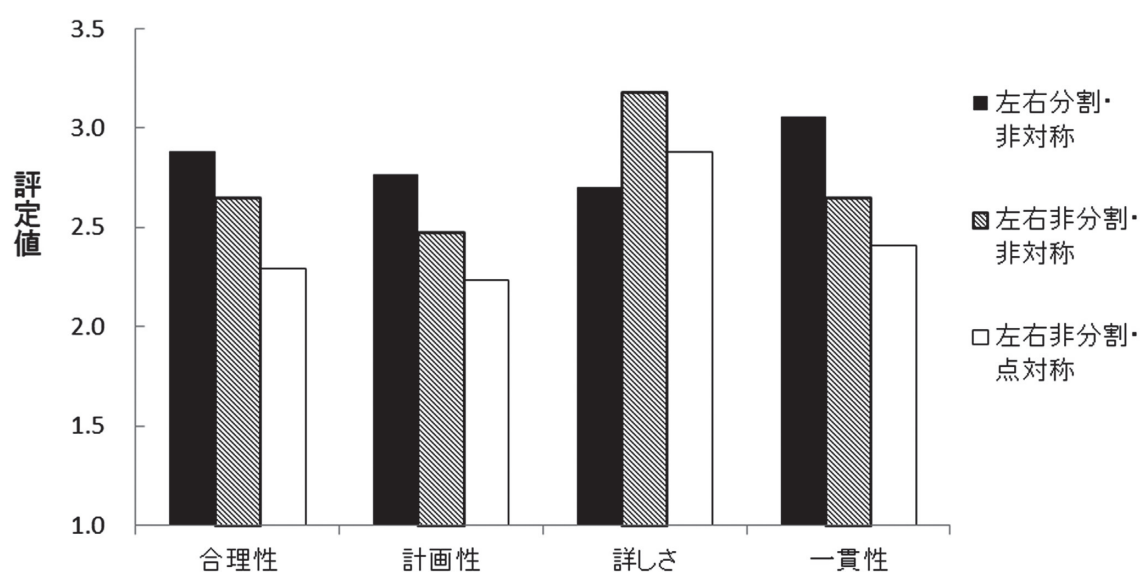


図1 各反応例における評定の平均値(「とてもそう思う」1—「まったくそう思わない」4)

表 4 各反応例における自由記述の内容（太字は肯定評価、（ ）内の数字は人数）

	左右分割・非対称	左右非分割・非対称	左右非分割・点対称
合理性	こまかく探索はできていないが、一応範囲内を探索できている(2) 同じところを通らずに探している(2) よく探しているところとそうでないところがある(2) 左右が対称でない探索(3) すべての範囲に同じ方略を用いていない(2) 出口まで出ていない(3)	移動距離を短くしようとしている、方略が合理的(3) 探索不十分(4) 思い付きの探索の仕方(4)	偏りはあるが、範囲内を探索できている(3) まず周回を探索してから中心を探索している(2) 移動キョリを短くしようという感じがみえる(2) すべての部分を探ることができていない(3) 1 周おえてからの探し方が求められているものに対して不足している(1)
計画性	左右に分けてから探している(5) 左右で探し方がちがう(2) まんべんなく探索できていない(3) 重なる通り道がある(2) ゴールでなく、途中で終わっている(1)	探せていない場所がないよう入口から出口まで最短の方法を考えようとしている(10) 内側の探索が思いついたように探索している(5)	入ってから出るまでを計画していると感じる(6) 短い距離(1) 後半の計画性が粗い(5)
詳しさ	ある程度こまかく探することができている(4) 左右 2 周ずつ周って探そうという意図がかんじられる(1) 探していない所がある(7) 全体を探しているが細かくはない(1)	ひととおりみる程度(4) 広さの視点がぬけている(2) 間隔があいている(2)	教示の意味はわかり、不十分ながら範囲の中を探している(1) 探索されていない場所(中央右上、左下)がある(8) 広い広い、草が一面にはえているということがイメージ不充分(1)
一貫性	途中までは一貫性はある(3) 左右で探し方に違いがある(9) 一貫性が感じられない(2)	全体をみてもらおうとしている(3) 課題の意図に基づいた探索の方略を維持している(2) 通り道を描きながら空いている方向に進んだようにとれる(3) 運動場と自分の大きさの比較が十分できていない(1)	点対称に全体を探索しようとしている(3) 全体からさがそうと一応している感あり(2) 途中で方略が変更されている(2) 中心部分に一貫性がない(1) 広い広い、草が一面にはえているということがイメージ不充分(1)
追加教示案	さがしたりない所はないですか(2) これで十分さがせましたか(2) 探してから出てくるまでを書いてください(2)	広いグラウンドだから、その間隔では探す場所がぬけるかもしれない(1) これでみつかりましたか(2) ゆっくりと確実に探す(1)	探したりないところはないですか(3) 草がおいしげっていることを強調(1) どこに財布をおとしたか、覚えていません(1)

考察

探索経路の合理性や計画性については、探索方略が領域分割であっても、全体を分けずに探索していても、評価に差がなかった。評定理由の自由記述より、左右の領域分割は、探索の合理性を示す指標にはなっていないといえよう。むしろ、探索距離の短い経路の方が合理性と結びついていると考えられる。探索の計画性の観点では、領域分割は計画性をうかがわせる効果がある。また、左右の探し方の違いへの指摘があることから、対称性のなさは計画性の存在を示すうえで妨げとなると考えられる。さらに、記述内容から、途絶がなく、交差が少なく、探索経路が短い方針は、計画性の評価に肯定的な影響を及ぼすのではないかと考えられる。一方、周回を終えずに、別の場所へ探索経路を向ける反応は、一部の評定者には思い付きのような印象を与えることがうかがえた。

探索の詳しさと一貫性については、フリードマン検定では有意差があったが、多重検定をおこなったところ、どの組み合わせにおいても有意な水準ではなかった。これは、調査 2 での対象者の数が少なく、いわゆるサンプルサイズが小さかったせいではないかと考えられる。全体では有意な水準であったことから、探索の詳しさについては、空白部分が少ない反応例ほど高く評価され、探索の一貫性については、左右非分割・点対称の反応例が高く評価される傾向があるといえよう。とくに、探索経路の対称性は、探索の一貫性を印象づけるのではないかと考えられた。

現在の新 K 式検査 2001 の判定基準でもっとも低い評価となる「左右非分割・点対称」の反応例で合理性、計画性、一貫性をもっとも高く評価されており、新 K 式検査 2001 の判定基準でもっとも高く評価される「左右分割・非対称」の反応例が、合理性、計画性、一貫性をもっとも低く評価されていた。すなわち、対称性は一貫性をみるうえでは重要であり、「途絶がない」「無駄な交差がない」という条件だけでは、合理性や計画性を示す十分条件とはいえないことが明らかとなった。

総合考察

本研究では、「財布探し」反応の臨床的解釈の際に、受検者の年齢がどのように影響するのかということと、探索の合理性、計画性、探索の詳しさ、探索の一貫性といった判定基準について、判定者は何をもとに判断しているのかの2点について探索的な調査をおこない、現在の判定基準を見直すための示唆を得ることを目的としていた。

本研究で実施した調査1から、「財布探し」課題の臨床的解釈では、受検者の年齢が考慮に入れられていることが確認された。また、調査2では、途絶や交差の点で問題となる例は用いず、対称性に欠ける例を用いた。その結果、判定においては、探索の詳しさは空白部分の少なさによることが支持され、周回数の考え方の妥当性が示された。さらに、一貫性については、探索経路の対称性と関連が強いことがうかがえた。一方、合理性や計画性については、判定者によって探索経路を示す描線から受ける印象にばらつきがあることがわかった。したがって、新K式検査の2020年版において、「財布探し」課題を採用することになった場合は、探索の一貫性を示す条件として、探索経路の対称性を明記する必要があるのではないかと考えられる。また、探索の合理性や計画性の判断基準について、さらに検討を重ねることが求められる。

本研究は、文部科学省科学研究費17K04481の助成を受けた。また、平安女学院大学倫理委員会の承認を受けている（平女倫発第17004号）。

引用文献

- Binet, A.(1905). Methode nouvelle pour le diagnostic du niveau intellectuel des anourmaux. *L'Année Psychologique*, 12, 191-244 [Kite.E.S. (1916). *The development of intelligence in children*. Vineland, NJ: Publications of the Training School at Vineland.]
- Buhler, C.(1938). The Ball & Field Test as a Help in the Diagnosis of Emotional Difficulties. *Journal of Personality*, 6, 257-270.
- 生澤雅夫・松下裕・中瀬惇（編著）（2002）. 新版K式発達検査2001実施手引書 京都国際社会福祉センター
- 小林重雄（1977）. グッドイナフ人物画知能検査ハンドブック 三京房.
- 近藤文里（1986）. プランする子ども 青木教育叢書.
- 楠凡之（2009）. 7～9, 10歳の発達の質的転換期. 白石正久・白石恵理子（2009）. 教育と保育のための発達診断 全障研出版部.
- 中瀬惇（1986）. 新版K式発達検査の項目「財布探し」; 横断的資料による反応の発達の分析京都府立大学学術報告. 人文 38, 103-148.
- 中瀬惇（2002）. 財布探し 中瀬惇・西尾博編著 新版K式発達検査反応実例集. ナカニシヤ出版.
- 清水里美（2014）. 発達障害領域でよく使用されるアセスメントツール. 松本かおり・明翫光宜・染木史緒・伊藤大幸（編）発達障害児者支援とアセスメントに関するガイドライン 金子書房.
- 新版K式発達検査研究会（2008）. 新版K式発達検査2001年版標準化資料と実施法 ナカニシヤ出版.
- 鈴木治太郎（1948）. 実際の個別の智能測定法（昭和23年修正増補版）東洋図書.
- 鈴木治太郎（1956）. 実際の・個別の智能測定法（昭和31年改訂版）東洋図書.
- Terman, L. M.(1916). *The measurement of intelligence*. Boston (MA): Houghton Mifflin.
- Terman, L. M. & Merrill, M.A.(1937). *Measuring Intelligence*. Boston (MA): Houghton Mifflin.
- 吉村拓馬・大西紀子・恵良美津子・小橋川晶子・広瀬宏之・大六一志（2016）. 全国の児童相談所における療育手帳判定に関する調査日本LD学会第25会大会抄録 Retrieved from <https://confit.atlas.jp/guide/event/jald25th/subject/PF19-1/advanced> (2017年4月7日)

Analysis of Clinical Practitioners' Interpretations of No-Pass Responses in the Plan of Search Problem

SHIMIZU, Satomi · KATO, Takashi

In 2 studies the present research examined clinical practitioners' judgements on responses in the 'Plan of Search' problem included in the Kyoto Scale of Psychological Development (K-Scale).

In Study 1, the questionnaire presented 3 types of responses along with the respondent's assumed age group. Participants were 27 clinical psychologists & school teachers. It was clear that all of them considered respondents age in interpreting a failure response. Also, in the case of the failure response assumedly produced by the older age group, they suspected that the respondent had some intellectual problem or inadequate understanding of the 'Plan of Search' problem.

In Study 2, the questionnaire for clinical practitioners consisted of three responses of 'Plan of Search' which varied in strategies. The purpose of this study was to clarify practitioners' standards for reasonableness, planning, thoroughness & consistency of the 'Plan of Search' responses. Participants were 17 school teachers who had used K-scale in their work. The results were that their rating of thoroughness was related to the amount of blank space in the answer area. Also, their rating of consistency was related to the symmetricity drawing.